

# 島田雅彦のロシア表象

中村 三春

島田雅彦は、東京外国語大学ロシア語科に進み、卒業論文は「ザミャーチンの散文について」であった。また、1981年、20歳の際にソ連に旅行して以来、たびたびソ連・ロシアを訪れている。島田作品には、ソ連・ロシアの表象がしばしば現れる。ここでは、島田のテキストにおけるロシア表象の輪郭をなぞってみたい。

## 1 方法としての〈亡命〉

島田は、1983（昭和58）年、22歳で「優しいサヨクのための嬉遊曲」（『海燕』6月号）を発表し、これが芥川賞候補となって注目を集めた。島田の文芸創作の根底における〈亡命〉の方法について、島田自身も語っているほか、批評家によってもたびたび指摘されてきた。まず、『認識マシーンへのレクイエム』（1985・2、朝日出版社）は、初期の島田のスタンスを評論の形で示したものであるが、ロシアからアメリカへ亡命した作家、ウラジーミル・ナボコフについて、島田は親近感をこめて次のように語っている（「夢の現場検証—小説論序説」）。

ところで、僕は純文学という一種の純粋培養の世界で生きようとしています。その場合は当然、先人達の真似をしなくてはいけないわけですが、ただそれは素直に真似てはいけません。素直な複製というのはいけません。そこで皮肉な複製を作らなければいけません。そうすると僕は、これまでに多くの業績を挙げてきた作家達のパロディを自ら生きなくてはならない、ということになるでしょう。例えば、亡命ということで、一つの文学的境地を編み出したナボコフを気取って、実際には亡命はしないにせよ、亡命者的な気分を味わうということは、当然しなくてはならないのです。

ここで島田が述べるのは、後進の作家として先人の業績をパロディ化して新たなテキストを創造するということであり、それ自体は一般的な作業についてである。ただし島田にあっては、先人の文芸様式全体をパロディ化することは、単なるパロディ化の域にとどまらない。島田のテキストに共通に現れる、人間が今・この現実根拠地を置くことのできない感覚、強烈な根源的違和感を盛り込む方法として、そのようなパロディが要請されるのである。それは、いわば方法としての〈亡命〉なのである。

この方法について、川村湊は特に言語の面からとらえ、「亡命は母語としての言語を失うことによって半分死者となることであり、亡命者の文学は言葉か読者かを失うことによって、世界の半分を見失ってしまうのである。しかし、だからこそ亡命者が回復すべき言葉を身に引き寄せたとき、その言葉は彼の恰好の武器となることがで

きるのだ」と述べた<sup>\*1</sup>。また、沼野充義はこのような方法としての〈亡命〉を「人工的亡命」と呼んでつぎのように述べている。

はたして島田雅彦がその人工的亡命文学の創造に成功しているかという点については、ぼくとしては残念ながら判断を留保せざるを得ない。しかし、人工的亡命が島国の枠内に安住している現代日本文学のアイデンティティを揺さぶるためにはきわめて効果的でまた重要な手法であるにもかかわらず、現代日本の作家たちは誰一人として島田雅彦のように一貫して執拗にこの手法を追求しようとはしなかった。その点に関する限り、彼の存在はユニークであり、榮譽ある孤高を守っているとも言えるだろう<sup>\*2</sup>。

以下、このような方法としての〈亡命〉をポイントとして、島田文芸におけるロシア表象を追ってみたい。

## 2 「サヨク」の成立

島田の第一作は、「優しいサヨクのための嬉遊曲」（『優しいサヨクのための嬉遊曲』所収、1983・8、福武書店）である。学生作家のデビューとして話題をさらったこの小説は、その後の島田の作風の起点として重要な意味を持っている。物語は、大学生の千鳥姫彦の日々を描く。彼は、オーケストラ団員のバージニヤ（逢瀬みどり）に夢中である。「バージニヤ」という愛称をつけたことから分かるように、自分の夢のイメージを相手に当てはめて投影する。千鳥の所属するサークルが、「優しいサヨク」の本体であるが、それもまた同様に夢想的なものである。それは「赤い市民運動」を自称し、サハロフ博士らソ連の反体制運動に連帯する活動をしている。実際のところ、指導者の外池、「社会主義道化団」を名乗る石切、田端、「無理」ら、多彩な学生たちがメンバーとなり、サハロフ博士救援の講演会を開き、まずまずの成果を収めている。だが他方でこの「道化団」は、大概、一緒に酒を飲んで猥談することを日課としている。「無理」は、サークルのパトロンを得ようとして、男色家にお尻を掘られる。千鳥はバージニヤを落とすべく、郊外の森に誘い、そこで彼女の唇を奪って恋人となることに成功するが、彼女への口説き文句の成り行きでサークルを脱退してしまう、という成り行きである<sup>\*3</sup>。

これは一見、単なるドタバタ劇のようだが、しかし、ここには、イデオロギーの終焉の時代の光景が如実に描き出されている。

---

\*1 川村湊「日本語文学における『亡命』とは何か―島田雅彦の閉鎖的側面について―」（『モダンほら公爵の肖像―島田雅彦の研究読本』、1986・9、北宋社）、169ページ。

\*2 沼野充義「ロシアより愛をこめて―島田雅彦と『手法としての亡命』」（『W文学の世紀へ』、2001・12、五柳書院）、93ページ。

\*3 以下、島田作品の内容概観は、中村三春「島田雅彦データベース」（『島田雅彦のポリティック』、1999・7、学燈社）を参照している。ただし、『無限カノン』3部作を除く。

彼らの活動は地味だった。本来、政治運動はお祭であり、芝居であるが、彼らはいつも学んでいた。叫んだり、泣いたり、暴力をふるったりすることはなかった。部屋に閉じ籠もり、机に貼りついて、じっとしているのだ。無表情といくらかの慎重さをもって、彼らは地下出版のロシア語の資料を翻訳したり、党指導者やKGB議長あるいは収容所所長に政治犯の釈放や待遇改善を要求する葉書を投函したり、ソ連関係の雑誌論文をめぐって、討論したりすることを主な活動にしていた。

彼らはイデオロギーのようなものを不必要であると考えている。必要なのは、優しさと知識である。サークルは、「人権擁護」という理念と、それを根拠付ける知識を崇拝した。こうして、「今、ソ連を考える」という冊子は理念を持った「カスチョール」というサークル機関誌に発展した。[...] サークルのメンバーは発足から二年たって一二人になった。新しいメンバーが入ってくるたびに、賑やかなコンパを催した。それ以外にもたびたび酒の席をつくった。外池はコンパを価値あるものと考えていた。一緒に飲むことで共通の話題を探し、一緒に騒ぐ仲になれば裏切らない程度の団結はできると信じていた。下手なイデオロギーで団結できるなどとは考えられなかった。

「サークル、やめたよ」

「えーっ、どうしてえ」 [...]

「僕は暴力は嫌いだよ」

千鳥は虫を殺さぬ子だった。暴力には拒絶反応を示した。警官・ヘルメット・鉄パイプ・武器・酔払いなど見るのも嫌だった。暴力は決まって、理不尽だ。暴力にはただひたすら首を横に振るべきだと考えていた。 [...]

「優しいサヨクのための嬉遊曲」の千鳥には、思想的・活動的な主体性やアイデンティティが不在である。どのような傾向にせよ、「左翼」が、何らかのイデオロギーを自らの主体性やアイデンティティの拠り所とするのに対して、彼ら「サヨク」にはそのようなものはない。イデオロギーやそれに基づく暴力を否定することにより、彼は旧「左翼」とは異なる新「サヨク」となり、それによって80年代以降の若者感覚を代弁したと思われる<sup>\*4</sup>。しかしその反面、イデオロギーに代わる主体性やアイデンティティの基軸は失われ、いわば、その都度の快樂原則に従った行動パターンしかありえなくなる。その意味で、彼らにはどこにも帰着地がない。帰り着くべき場所のない彼は、快樂原則に従って、その場その場に応じて、かりそめの帰着地を模索する。それは微視的には、不在のアイデンティティを充填する受動的なセクシュアリティ、すなわちマゾヒズムやオナニズムの形をとり、そ

---

\*4 磯田光一「島田雅彦という装置」（『左翼がサヨクになるとき—ある時代の精神史』、1986・11、集英社）は、この小説を「政治運動の公的性格が、次第に私的な恣意性をもちはじめた過程」の結末に現れた作品として規定する。「ここではゲーム化した『サヨク運動』と、メルヘンじみた恋愛とが、相互に置きかえ得るものとして、しかも相互に滲透しながら展開するのである」（同書、223ページ）。

れ以前に、そのような象徴的行為としての性行為として表現される。そして他方では、イデオロギーや主体性が伝統的に基盤を置いてきたナショナリティもまた、そのような方法によって相対化される。島田テキストにおける〈亡命〉の表象が意味を持つのは、ここにおいてである。従って、文字通りの越境や渡航の表現を伴う〈亡命〉は、必ずしもそれを伴わない、つまり、今・ここにおける〈亡命〉と根底において響き合うのである。

千鳥はそのような意味での〈亡命〉者なのだが、その触媒は、当時の共産圏としてのソ連・ロシアである。それは彼らがむしろ「サヨク」を名乗ることと深い関係がある。すなわち、伝統的な思想基盤を脅かすことを本質とする彼ら「サヨク」は、もっぱら旧「左翼」の牙城であるソ連・ロシアを批判することが仕事であるようなグループだからである。そして千鳥はバージニアへの求愛の趣向として、そのサークルすらもやめ、結果的に自らのあらゆる根を断ち切ろうとするのである。これが「優しいサヨクのための嬉遊曲」の構図であるが、島田のテキスト展開においては、その延長線上に、実際に〈亡命〉的な海外脱出を図る人物が描き出されることになる。

### 3 貧しきソ連

島田の三冊目の小説集である『亡命旅行者は叫び呟く』（1984・2、福武書店）は、「亡命旅行者は叫び呟く」（『海燕』1983・10）と「大道天使、声を限りに」（『海燕』1984・2）を収める。特に「亡命旅行者は叫び呟く」は、島田がソ連・ロシアを舞台として初めて大きく取り上げた作品である。物語は、ミラクルワールド・ソ連のツアー客であるキトーとワタシ（渡志）の二人を対位法的に描く。選挙管理委員会という「俗物根性の掃きだめ」に勤めるキトーは、日本に「性交機械」であるミチコを置いてきた。ハバロフスクで子どもたちにガムをねだられ、それが父キトーの記憶の占領下日本とだぶる。モスクワ到着後、すぐに駅のトイレで娼婦と「交尾」する。郊外のアパートの廃墟で出会った娘エネールギヤ一五歳と、30ドル及びセイコーの腕時計を代償として性交する。他方、外国語マニアのワタシは、脱日本のためにレニングラードを訪れる。朝鮮人になりすましてディスコで若者と会話したり、公園で神出鬼没の興業をするコメディアンを探してウォトカ片手に夜間徘徊したりを繰り返している。キトーに誘われて女優兼娼婦のクラアラの部屋に転がり込むが、未経験のワタシは二人がベッドにいる間に部屋を抜け出し、酩酊して民警に逮捕され、強制送還される。結末、船で日本に帰ったキトーとミチコの再会の場に出くわす。

その続編である「大道天使、声を限りに」は、ソ連・ロシアが舞台ではないが、前作と深いつながりがある。前作と同様に、キトーとワタシの対位法によって物語は進行する。その後、キトーはミチコの両親に紹介され、結婚する羽目になる。二人とワタシは偶然渋谷で再会したが、ワタシが馬鹿にするのでミチコは彼にコップの水を浴びせる。塾を首になったワタシは母から金をせしめて大阪まで巡礼に出る。キトーはついに結婚する。ワタシは大阪のドヤ街で新左翼くずれと話をし、「同志になろう」といわれて拒絶、酒を浴びせられる。キトーは新婚旅行中に決めたミチコの忠実な下僕となることを、その後の日常生活でも継続する。ワタシは喫茶店のウェイトレス・カナエに恋をし、ついに童貞を捨てるが、彼女はもっと一人前になったら迎えに来てほしいと言う。

次の引用は、「亡命旅行者は叫び呟く」の結末近くの、キトーがモスクワを出発する場面と、日本への帰国後、

キトーとワタシがミチコを挟んで言い合う場面である。最初の引用で「島」とは都市のことであり、特にここではモスクワを指す。「観光客が上陸できる島は限られている」と巻頭近くに述べられている。

次の日、キトーは島をあとにした。その目にはうっすらと涙さえにじんんでいた。

「また来るからな。本来の自分を取り戻すために必ず来るぞ」日本では彼は世を忍ぶ仮の姿でしかない。本来の自分はこの国にあるのだ。僕は日本に戻れば、公務員、ミチコの枕に過ぎないが、ミラクルワールドでは貴族だ。僕は契約付きの貴族なのだ。

横浜へ向って海を滑ってゆく船はわずかばかりのミラクルワールドの匂いを残していた。バーにはロシア娘がおり、その白い肌、金色の髪を眺めながらウオトカを飲むことができた。

ナホトカを出て、二日と五時間経つと横浜の港が見えてきた。空気の肌ざわりも匂いもミラクルワールドのものではなくなっていた。この空気のもとで何年も過していたのだなあとと思うと、彼は奇妙な隔絶感を覚えた。

「君も生活者になればわかるよ。日本人とはどういうものか。生活者は日本人であるよりしようがないんだ。なっ、ミチコ」

ミチコは機械油に潤んだわいせつな目でキトーを見ていた。〈大きな子供〉キトーはミラクルワールドで重ねた悪戯の罪悪感から逃れるために母親もときミチコを必要としていた。

「お母さん、ごめん」といわんばかりに彼はミチコに回帰し、同時に生活者として日常に回帰することによって、身の安全と精神の安楽を確保しようとしたのだ。

「あんたは欺されているのですよ。日本人であることはすなわち、囚人であることなのに。もう駄目です。ああ、バカバカバカ」

「亡命旅行者は叫び呟く」に描かれるソ連＝ロシアは、特にロシアである必要はないような、単に貧しい国でしかない。若い男はセイコーの腕時計を日本人観光客からほしがり、若い女は体を売って金を受け取ろうとする。スーパーには商品が乏しく、市民は行列に慣れきっている。「優しいサヨクのための嬉遊曲」の脱イデオロギーと同じ感覚により、ソ連＝ロシアの社会主義や体制そのものには、ほとんど視線が向けられない。それは、貧しきソ連でしかない。しかし、その貧しきソ連において、キトーとワタシの二人は、考え方が違うものの、共通に「日本人」という外見を脱いで、別種の人格になりうるものと信じている。

ここでソ連＝ロシアは、〈亡命〉という名で呼ばれる再生の触媒にほかならない。しかもその再生は、きわめてアイロニーに満ちたものでしかない。ロシアは、貧しいからこそ、建前と華美によって覆われた日本国内の社会の虚飾が一切取り払われ、人間の欲望がそのままに表現される土地として夢想されるのである。この二人の違いは、帰還した日本において日常に馴化するキトーに対して、最後まで〈亡命〉的な違和感を捨てないワタシの差であり、それが対位的な対照を作り出している。その対照が明確に描き出されるのは続編の「大道天使、声を限りに」である。ここでポイントは純粹に方法としての〈亡命〉に集約され、ソ連＝ロシアそのものはるか

遠景に退いている。ただし、そのような〈亡命〉感覚が、キトーとワタシのモスクワ渡航に深く由来することは確実である。方法としての〈亡命〉の触媒というロシア表象のあり方を、『亡命旅行者は叫び喚く』は明確に打ち出したと言える。

#### 4 〈亡命〉としての「発狂」

同じく初期作品に属する『天国が降ってくる』（『海燕』1985・9、1985・10、福武書店）は、島田の最初の長編小説であり、ここでもまたロシア表象が大きな役割を果たしている。主人公・葦原真理男の母親は彼に英才教育を施そうとしたが、彼は小学校の入学式でウンチをもらし、画集に落書きをして成長した。5年の時に新聞社勤務の父親の赴任に伴って一家でモスクワに渡り、日本人学校の集団で完全に孤立し、画集の美人を相手にオナニストとなった。1月1日、赤の広場での騒ぎに乗じてシャンパンをラッパ飲みし「女の母親を姦淫せよ」とロシア語で叫び響きを買う。愛想を尽かした母親の意向で先に日本に帰され、若い国文学者・中之島妙子を保護者として受験勉強をするが、求愛して拒絶される。

真理男以外の家族も、6年間の滞ソ後に帰国したが、妹りりかとはほとんどロシア人と化していた。真理男は、日本での生活能力を失った彼女を守ることに専念し、それは兄妹の関係を逸脱しそうなほどである。あいかわらず妙子は彼を拒み続け、恋人の精神分析医・榊を交え、海のクルーズで病気を治そうとする。しかし真理男は浮き輪とともに流され、九死に一生を得て、2人のもとを去る。モスクワで一緒だった混血児ゴーシャが新潟で寿司職人を営み、会いに行くとゴーシャとりりかとは結婚したいと言う。それ以来、真理男は自室に籠城して資料を集め、自分についての音声カタログ製作に没頭する。錯乱の中で彼はりりかと交わり、ホテルの上階に部屋を取り、カタログの最終章を録音し、「天国の正体を見極めてやるぜ」と語って傘を差して窓からダイビングして死ぬ。

後に妙子と面会した「島田雅彦」は、彼女から今はゴーシャと結婚して母となっているりりかの一人娘マリヤが、実は真理男の種であることを知る。ディスプレイにつながれたコンピュータには、真理男の録音したデータから真理男が復元されるはずだったが、妙子の期待に反して、それは発狂したか、あるいは神であるようなわけの分からないキャラクタをアウトプットするだけであった。意識的に構築された構成によって、多面的に理解できるテキストとなっている。ところで、このテキストにもまた、ロシア表象が影を落としている。

真理男は、ロシア、モスクワに〈亡命〉し、日本への帰国後もその〈亡命〉を維持し続け、すなわち人間関係においても欲望においても、違和感を本質とする生活を続ける点では、「大道天使、声を限りに」のワタシに近い。だが、その表現の強度はより高く、内容的にはシリアスになっている。ここでも、渡航先がロシアであることに本質的な意味はないように思われる。最愛の妹りりかは、いわば彼の〈亡命〉の象徴的な同伴者であり、だからこそ彼はりりかを究極に必要としたのである。その彼が、りりかをゴーシャに奪われて引きこもり、錯乱の中に自己幽閉するのは、一人での〈亡命〉を完成させる意味がある。

ただし、結局真理男が求めた、帰着地を自ら消去して価値の攪乱状態を作り出す境地は、真理男の死後の、

りりかやコンピュータ「真理男」によって実現されたとも言えるだろう。りりかは、真理男の死後、訪れた「島田雅彦」によって次のように描かれている。

彼女は私の予想よりはるかに崩れた日本語を用いた。東京での生活の方が長いはずなのに、覚えたての日本語を実験する国籍不明者のようなのだ。[...] 日英露の三カ国の混成語を母国語であるかのようによどみなく話すのだ。

「いつもその調子でゴーシャ君と話してるんですか？」

「はい。we talk <sup>こんなぐあいに</sup> タークカク はなしやすく everyday なぜなら、we モーজেト ブイチ imigrate into America」と彼女は私をからかうように答えた。

「なぜ、アメリカなんかに移住するんです？」

「America ではルースキーすんでるし、すし Bar のいたまえもいるですから」

また、「闇の中にはアンチ太陽が輝く。人はその黒い太陽と分子結合することによって、天国となる。天国は闇の中であって、闇そのものではなく、クノップルデータである」云々と、コンピュータ「真理男」は支離滅裂な言葉をはき出し続ける。「島田雅彦」自身、「いつそのこと、私も発狂してしまいたい。発狂の恐怖と欲望は実は全く同じものなのだ。誰しも多かれ少なかれ、発狂したいと願っているのだ」とつぶやく。このような「発狂」それは、今・ここで可能となる、方法としての〈亡命〉の一種にほかなるまい。

## 5 エトロフとシャーマニズム

その後、毎年作品を量産し続けた島田の小説の舞台は、日本はもとより世界各国・各地にひろがり、紀行文やエッセーで取り上げられる場所も、ロシアのみならずあらゆる都市や辺境に及ぶことになる。重点的にロシアを扱ったテキストとしては、『アルマジロ王』（1991・3、新潮社）所収の短編「チェルノディルカ」（『すばる』1990・10）が挙げられる。主人公は、二度目にレニングラードを訪れたルミである。彼女は、ホテルのレストランで知り合った宇宙論を研究するサムソンに招かれて、百キロほど郊外にあるチェルノディルカの実家を訪問する。そこはソ連の都市でありながら昔ながらの帝政時代の暮らしを守る人々が住んでいた。町長以上とも言われるサムソンの父らと交歓し、ルミは外国人と結婚するのが家訓だというサムソンに求婚され、「チェルノディルカ」がブラックホールの意味だと教えられる。この作品のロシア表象で突起すべきは、モスクワ・レニングラードなどの都市部ではなく、また、現代の社会風俗だけでなく、ロシアの基層社会の有様や伝統的な民俗についてもそれなりに描かれている点である。この傾向が、今までのところ、『エトロフの恋』に結実するシャーマン的な民俗の導入へと繋がって行くところである。

『エトロフの恋』は、『無限カノン』三部作の掉尾を飾る作品である。『無限カノン』は、日本の「現地妻」蝶々夫人とその息子に始まる系譜の運命を描いた大作である。これらは、プッチーニのオペラ『蝶々夫人』の続

編翻案ということができる。この三部作の完結編『エトロフの恋』は、舞台が択捉島であり、再びロシアが登場する。少々長くなるが、以下、三部作の梗概をまとめてみる。

第一作の『彗星の住人』（2000・11、新潮社刊、[初出]『三声のリチェルカーレ』、『新潮』1999・1、『無限カノン』、『新潮』1999・5。増補改訂の上「純文学書き下ろし特別作品」として刊行）は、18歳になった君・椿文緒（ツバキフミオ）は、失踪した父（ダダ）・常磐カヲルを探す旅に出る。初めに立ち寄った墓地で立ち寄った父の墓はゴミにまみれ、悪罵が殴り書きされていた。郊外の常磐の屋敷にアンジュ伯母さんを訪ね、カヲルの話を聞く。カヲルは、麻川不二子という女性に命掛けの恋をして引き裂かれたという。アンジュが10歳の時、カヲルは川向こうに住む母・キリコが死んだために常磐家に引き取られてきた。カヲルの父・野田蔵人は作曲家で、アンジュの父・シゲルの友だったが癌で死に、シゲルに妻子の後事を託したのだ。

カヲルは兄のマモルはカヲルにつらく当たったが、父母に教えられた音楽が素晴らしく、アンジュの祖母やメイドラに可愛がられる。不二子はアンジュの同級生で、カヲルが彼女を思慕をし始めた頃、マモルもまた彼女を意識していた。不二子の下着姿を盗撮したマモルに宣戦布告したカヲルは、中学生らに羽交い締めになされ裸で不二子の家の前に置かれたが、不二子はカヲルを部屋に迎え入れた。だがその後不二子は父の赴任のため渡米する。

カヲルの父（文緒の祖父）・野田蔵人の出生の秘密。アンジュ伯母は文緒に蔵人はプッチーニ『蝶々夫人』の続編を作る構想があったことを教える。なぜなら、蔵人こそ蝶々夫人のモデルの子孫だったからだ。——1890年代、アメリカ海軍士官ピンカートンは15歳の芸者「蝶々さん」を現地妻にした。習俗の違いと世間の白眼視に耐え、彼女は彼を愛したが、3年半後、旅から戻り再び長崎に寄港した彼は、彼女に会いもせず、手切れ金を渡そうとする。彼女は自刃し、彼女の物語は小説さらにオペラとなり、一方「茶目（トラブル）」と呼ばれたその息子は海を渡ってピンカートン夫妻の子となった。その子、ベンジャミン・ピンカートン・ジュニア（JB）こそ、蔵人の父である。

JBは母（ママ）の国日本に憧れ、サンフランシスコで留学生ミス・スズキから日本語を教わり、やがて海を渡り、国情を探る使命を帯びて神戸の領事館に勤務し、野田大尉の妹・那美と結婚するが、赴任先の満州で那美は蔵人を生んで死ぬ。蔵人の乳母でユダヤ系ロシア人のナオミと再婚したJBは、日米両国に対して平和中立主義で臨み、戦中戦後をくぐり抜ける。戦後、妻子とともに長崎を訪れたJBは、教会のシスターから母の形見の短刀を受け取る。それは維新の折、逆賊として自害した「蝶々さん」の父が自害用に天皇から下賜され、また彼女もそれで自刃した刀だった。

蔵人は戦後の混乱期に学校を転々とし、ピアノとギターで日銭を稼いでいた。映画監督から女優を慰めるよう頼まれ、蔵人は松原妙子の家に通い、彼女に恋をする。息子からその話を聞いたJBは、初めて蔵人の祖母にあたるマダム・バタフライの悲劇を語り、妙子がマッカーサーの愛人であることを知らせる。蔵人の恋が受け入れられたかに思われ、2人が交わった直後、妙子は彼を突き放した。マッカーサーは窮地に陥り、妙子だけが彼の狂気をなだめられる人であったことを知った蔵人は、彼女に謝らなければならないと思う。

マッカーサーが罷免された頃、JBも息を引き取る。彼女に捧げた曲を彼女の家の庭で蔵人は聴くが、ガラス越しに見えた彼女の背後には誰か男がいた……。アンジュに連れられ、文緒はカヲルの旧友花田を訪れる。花田は元前頭の雲取山で、後に伯父のヤクザの家を継ぎ、超秀才の伊能とともにカヲルの理解者だった。マモルは巨

乳娘の美智代を弄び、花田組がそれを種に恐喝してきたので、マモルは後始末をカヲルに命じた。カヲルは単身、組長に会い、シゲルに常磐商事が花田組を吸収することを提案し、丸く収め、野田の家から出てアメリカへ渡る。

3部作の第2作は、『美しい魂』（2003・9、新潮社刊、〔初出〕『新潮』2003・8）である。蝶々夫人の孫が繰り広げる、皇太子妃となる女性との明日のない恋愛を描く。カヲルは文緒の母(ママ)とアメリカで会い結婚したが、カヲルはかつて別の女を愛していた。カヲルは不二子が大学に通うボストンで彼女と会い、互いの愛を確かめて再会の約束をするが、祖母危篤の報により彼は帰国する。母アミコは父シゲルのかつての不倫を根に持ち、自分もカメラマン宮崎と情事に耽るが、裸体写真を種に恐喝され、気づいたアンジュがカヲルに相談し、カヲルは動くがシゲルの命を受けた花田の子分によって宮崎は痛めつけられ、腹いせに宮崎は母がOG会の幹事を務めアンジュの通う大学の学長に写真を送りつけた。アミコは手首を切るが助かり、以後自らを自宅に軟禁し、宮崎はその後花田の手下から長く半殺しの目に遭う。

カヲルはシゲルの愛人で声楽家のよしのとレッスンの後で情事を重ねていた。不二子が帰国し、カヲルを愛するアンジュは彼とよしのの仲をあらかじめ不二子に告げ、彼に迫るが拒絶される。再会した不二子はビアホールに彼を置き去りにし、友達の間でいることを手紙で伝える。カヲルはよしのの勧めでカウンターテナーの訓練をして野田の性を名乗り、コンサートデビューを飾る。はねた後、国連に就職する不二子を誘って結ばれようとするが、直前で果ててしまう。

その頃、清仁親王英宮の意中の人として不二子の名が挙がっていた。不二子は公式に断りの声明を出す、皇太子は諦めなかった。アンジュは裸体でカヲルを誘惑し、二人は交わり、また一つ罪を犯したとカヲルは思う。天皇が崩御して英宮は皇太子となり、再び不二子は候補者としてマスコミの標的とされる。常盤家に繋がりを求めた皇太子に、アンジュは不二子には恋人はいないと告げた。それをアンジュから聞いた君・文緒は、ついてはいけない嘘をついたと彼女を詰(なじ)る。

皇太子は不二子に猛烈にアタックした。カヲルは不二子に会う設定をアンジュにさせようとし、アンジュは自分カヲルとの関係とカヲルの企みを父シゲルに告げる。シゲルは激怒し、カヲルを感動する。カヲルは変装して通勤途中の不二子に連絡し、1時間だけの逢瀬の際に彼女は皇太子の使命に共感できることと、恋が死なないことを語る。その後、2人組に襲われ、喉を潰すと脅されておカマを握られる。カヲルは始末を花田組に頼もうと新聞記者となった伊能とともに訪れるが、シゲルの命を受けてカヲルを襲わせたのは花田だった。不二子を誘拐すると言うカヲルに、花田は不二子と会わせることを約束する。

不二子は皇太子に求婚されるが拒絶する。しかし皇太子妃は皇室の外交官であるという説得を受け、かつて愛した人の歌声を聞くこともできると言われる。2人は伊能の手配で尾行をまきドライブに出るが、その時不二子の婚約の決意は固まっていた。その後、常磐商事は没落し、麻薬浸りとなったマモルはカヲルを中傷する情報をネットに流すが廃人となり、すべてを失ったアンジュは何者かが毒を入れたカヲルのブランデーを飲んで失明する。今は政治家となった伊能は、文緒に、カヲルがエトロフにいると話す。

そして3部作の最後は、『エトロフの恋』（2003・9、新潮社刊、〔初出〕『新潮』2003・1）である。これは過去に囚われたカヲルが、エトロフの人と自然によって再生する物語である。私・カヲルはプリンセスに恋をしたために追放されてサハリン経由でエトロフに来た。灰色の空、何もない「繁華街」、鮭の養殖場、難破船。

私はあなたがエトロフに来る時にこの島の人があなただを歓迎するようにし向きたい。島の議長に会い、サハリンで知り合ったニーナの母でシャーマンのマリアに会いに行く。霊能者のマリアはもうじきニーナが来ると告げる。帰ってきたニーナは、夜に森の死者たちの声がうるさくなると言う。ニーナも霊能力を持ち、それを捨てようとしていた。私は自分の過去の物語をニーナに聞かせる。

あなた（不二子）にあてて、エトロフの風土と歴史についてメールを書く。するとそれを伊能が転送してくれる。過って大麻を食べ、酩酊してニーナに救われ、自分が男の機能を失ったことを知らせる。島のホテルの料理店を共同経営として「フジコ」と名付けた。ニーナと関わった男が4人死んだので別れろと言われる。彼女は私に4人の死にざまを語る。やはり霊能力を持つニーナの弟コースチャはマリアが春に死ぬと予言する。コースチャはシャーマンになる修行をするために森に入り、私も同行する。断食の幻想で、歌声とともに男性機能を失った五年前が思い出される。森でアンジュや不二子の幻と会い、私は男性機能を回復する。コースチャは、手に刀をもった日本の娘が私を訪ねて来るという。

当面の問題は『エトロフの恋』であるが、そこに至るまでに初めの二作も概観しておく必要がある。『彗星の住人』は、当初、事実に基づいて制作されたプッチーニのオペラ『蝶々夫人』を大胆に拡充・展開して創作された壮大なパロディである。蝶々夫人の子どもであるJBの系譜を、3代にわたって物語る中で、「現地妻」（蝶々夫人）の悲劇を、後進国と列強との間の国際的力関係が男女関係（ジェンダー）の領域へ投影される仕方を執拗に追跡する形で描いている。JBの子・蔵人は、マッカーサーの愛人である女優・松原妙子への恋愛に陥るが、マッカーサーは言うまでもなく、占領下日本において天皇以上の絶対的な権力者であった。妙子は、そのマッカーサーの狂気を抑制するために自分を提供したのである。

続く『美しい魂』では、蔵人の子・カヲルが登場する。後に皇太子妃となる不二子への恋愛が、物語の中心となる。カヲルは母の愛人の常盤家へ養子に入り、カウンターテナーの異才を発揮する。皇室タブーに挑戦することにより、恋愛の強度を極限まで高めようとした作品である。そして、『エトロフの恋』では、その超強度の恋愛を誇ったカヲルの、男性機能喪失という事態が根底に流れている。エトロフは、マリア、ニーナ、コースチャの霊能者母子が主役となり、その他エトロフの森の自然に包まれて、カヲルの男性機能は、神秘の力による治癒を遂げる。結末、カヲルの娘・文緒の到着の予感が語られる。こうして、円環に決着をつけるのは霊能力、すなわち神秘の力ということになる。これは、小説の力の表現であると同時に、小説の力の限界をも示すことのように思われる。

そしてここにおいて、島田のロシア表象は、島田のテキストとしては特異な転回を遂げたのである。初期のロシア表象は、貧しきロシアのイメージの中に、方法としての〈亡命〉のテーマを盛り込むものであったが、『エトロフの恋』の場合には、エトロフのシャーマンと自然の力が、単なる場所の提供のみならず、より人間主義的に本質的な意味を持つように変わっている。描かれるのが都市を示す「島」から、文字通りの「島」へと変化したということでもある。これは、シャーマンに象徴される自然や伝統的民俗の深層が、人の心身を癒す力を持ちうるとする見方である。その意味では、初期の、全く何の救いもない、アイデンティティや主体性の崩壊した存在状態とは、大きく異なってきたと言わなければなるまい。

シャーマンの要素は、必ずしも島田2000年代のテキストに固有のものではない。『夢使いーレンタルチャイ

ルドの『新二都物語』(1989・11、講談社)では、守護霊とともに、人の夢に入り込んで癒す「夢使い」が描かれ、『ロココ町』(1990・7、集英社)には文字通りのシャーマンが登場する。『預言者の名前』(1992・4、岩波書店)は、全編これシャーマンの事績についての物語にほかならない。しかし、『エトロフの恋』のシャーマニズムは、島田的な方法としての〈亡命〉が到達した最終的な境地として理解しなければならない。そして、この要素は近作『カオスの娘 シャーマン探偵ナルコ』(2007・6、集英社)においては、ロシア表象とは切り離された形で全面化している。これは、胃癌で死期の迫った大学教授サナダが、「世界経済評議会」のメンバーを自爆によって葬る結末に至るまでに、魔王子によって誘拐・監禁・凌辱され、記憶を初期化されて復讐に燃える真理子と、シャーマンのナルヒコとが暗躍する物語である。『エトロフの恋』のシャーマンの要素と、『自由死刑』(1999・6、集英社)の期限付きの人生という要素を合体したヴァイオレンス・アクションである。ロシア表象と関わる方法としての〈亡命〉という島田のスタンスは、このように華々しく変形されながらも、今後も島田の創作の根源に位置づけられるものと思われる。